

## 機能分化と統合

—21世紀へのメッセージ—

国立精神・神経センター国府台病院部長

神経内科 湯 浅 龍 彦

昨年末から本年にかけてコンピュータ2000年問題への対応については如何でしたでしょうか。20世紀最後の年となる本年は、21世紀へ残された助走期間であり、不安と期待が入り交じった独特の瞬間であろうと思われます。大きな時代の“うねり”は、政治、経済、文化、科学、医療、社会構造など、あらゆる場面を飲み込んで例外はあり得ません。来世紀にどのような時代が約束されているのか知るよしもありますが、山積する多くの問題に対して進むべき方向性だけは見定めておかなければと考えます。

来世紀の重要課題は、地球規模では第一に膨張する人口問題であると思います。簡単に言えば60数億に垂んとする人口に、十分な食料を分配できるのかという重い課題なのです。その延長にエネルギー問題、環境問題が続くこととなります。我が国に於いては人口の高齢者と少子化、並びに機能麻痺寸前の都市依存型社会構造をどう打開して行くのか、ということが重要な課題となるでしょう。

地方の中核都市で20数年過ごし、上京して東京の西部、都心、そして千葉に移り住んだ経験からいえば、都心の生活も決して悪いものではありませんでした。しかし、その生活環境たるや研究室のコンピュータはすぐに薄墨を引いたように黒くなるし鼻腔内にもススが溜まり、最悪です。しかし都心を少し離れるだけで空気は美味しく、緑も多くホッと一息つける環境が残っています。

上京した間もなくの頃、都市計画を専門とする一人の建築家（Y氏）と出会いました。

彼の話す巨大都市の機能分化の話は、脳の機能に関心を持つ小生には、極めて興味深いものでした。それは周辺都市を含めた東京圏は、有史以来前例のない程に人口が集中した超過密地帯であります。地域の特化が進んできているというのです。都心部に於いては空洞化が着実に進んでいる一方で、面白いことに、郊外ではある地域に一つの特徴ある機能が芽生え、その特質が益々助長されて行くというのです。例えば美術館が一つ出来

るとその地区には次々と美術館が集まり、アミューズメントパークが出来るとその地域では益々その傾向が強まるというのです。これはまさしく大脳の皮質の機能分化にそっくりなのです。都市には人の流れ、情報の流れ、物流の流れがあり、それらの活動を支える道路、鉄道、バスなどの交通ネットワークと、目に見えない所に水道、下水、電気、ガスなどインフラストラクチャが整備されています。都市そのものが巨大な生きもののような性質を備えつつあるのです。アリ塚をみればアリの習性が推測されるのと同様に、都市は人の生物現象の断面を見せます。東京を中心とした関東の巨大都市圏は、ある種の機能を周辺の衛星地域に移譲しながら、有機的な都市ネットワークとして発展して行くものと予測されます。それは丁度脳の進化の過程で増大する情報を処理するために視床という古い脳の外郭に大脳皮質という新しい構造を発達させたことに類似するのです。将来の東京は脳型都市と呼ぶものに変貌するかもしれません。最近の若者に見られる携帯電話のファッションも、考えようによっては一人の人間が複数の相手に瞬時に情報を伝達する神経細胞の人間に変わりつつある姿と見なすことも出来ましよう。

機能分化と統合は、来世紀の我が国の医療の進むべき方向としても重要なテーマとなるでしょう。ここ数年旧帝大を中心として、大学院大学化の方針が決定されたことは、我が国の医療戦略を考える上で極めて重大な意味を持つものと思われます。科学の分野に英才を集約したいということからすれば、当然の選択であったかもしれませんが、医療の現場に優れた臨床医を確保するということが真剣に考えなければならぬと思うのです。その中で国立センター病院、国立病院・療養所では高い診療レベルを国民に提供し、医師の卒後教育という目的意識をしっかりと認識することが重要です。

本誌「医療」にも時代のうねりが否応なく迫って来ています。時代のうねりを街道でみつめ、過ぎ行く時代とこれから到来する新時代の狭間にあって苦悩した青山半蔵もかくあったことかと想い巡るこの頃ですが、本誌はそのような新たな時代に、新たな使命を持った医療集団のための情報誌として、世界にも開かれた情報発信の前線基地としての役割を果たして行かなければならないと考えます。